



大岩オスカル 作「はじめてアート」

2023年2月

株式会社 Case 発行

OSCAR OIWA

ART FOR THE FIRST TIME

April 29- June 4, 2023

GALLERY CAPTION



⑧ どうして いろいろな アートがあるのだろう
 大岩オスカル 作「はじめてアート」より

— 展覧会概要 —

- 展覧会名: 絵本出版記念: 大岩オスカル “はじめてアート”
- 会期: 2023年4月29日(土・祝) - 6月4日(日)
- 開廊時間: 12:00-18:00
- 休廊日: 月火曜日および5/1-5/7
- 会場: GALLERY CAPTION (ギャラリーキャプション)
 〒500-8813 岐阜市明德町10 杉山ビル1F tel 058-265-2336
- 大岩オスカル サイン会: 4月29日(土・祝) 14:00-15:00 * 予約不要 / 書籍をお買い上げの方に限ります
- お問い合わせ: 担当/ 山口 (月火曜日、祝日をのぞく 12:00-18:00)
 tel 058-265-2336 fax 058-265-5715 caption@mbe.nifty.com
<https://www.gallerycaption.info/>



世界を書き換える、アート

伊村靖子(国立新美術館 主任研究員)

上手にピアノがひけたり、上手に絵が描ける人だけがアーティストではありません。アートを心から感じる事ができ、見ることができる人もアーティストなのです。(アレクサンダー・カルダー、パブロ・ピカソ、ジョアン・ミロ、マルセル・デュシャン、キース・ヘリング、大岩オスカル)

——『はじめてアート』解説より

私があらためて、大岩オスカルの作品に出会ったのは、パンデミックによって一変したニューヨークの街を日記調に伝えた「Quarantine drawing series」(2020年)である。デジタルの緻密な線で描きこまれた日常は、等身大の空間に圧縮された時間の層の連なりのように感じられ、いつまでも見入っていた。その後、東京都現代美術館で《クイーンズボロ橋、ニューヨーク》を観た時、圧縮された時間が解放されていく場に、ほかの観客たちとともに立ち会ったような感覚を覚えたことが、深く印象に残っている。マンハッタンの自宅から自転車に乗り、クイーンズボロ橋を渡る大岩の後ろ姿は、私にとっての日常とも重なる。しかし、その視線の先に想像されるのは2020年4月のニューヨークの新型コロナウイルス大流行だ。この一連の体験は私に、他者への想像力を喚起するアートの力を感じさせた。それに飽き足らず、自分も何かを始めようと思いついた瞬間でもあった。

2023年2月に大岩の『はじめてアート』が28年ぶりに再版され、初版の原画を観た時、新たな時間が流れ始めるのを感じている。なにしろ、28年という歳月は10歳の少年が大人になるのに十分な時間であり、ひとつの世代を経て次の世代へとバトンタッチする時間のサイクルである。紙焼きの写真からデジタルデータへ、カメラからスマートフォンへと記録メディアの推移も窺える。今、10歳の少年の眼は何をとらえようとしているのだろうか。冒頭に示した解説は、「アーティストになろう」からの引用であるが、つくることだけでなく見ることが促されているところに、本書の特徴がある。主人公の少年が一人称の視点で世界と出会い、さまざまな現象を「アート」として認識していく。少年にとって身近な家族それぞれの立場から「アート」を考える場面もある。見ることを通して、世界の差異をとらえるものさしが増えていくのだ。その端々に実在するアーティストによる作品のイメージが織り込まれており、見ることの歴史という長い時間軸との間を行き来することもできる。初版と再版で何が変化したのか、比較する楽しみもあるだろう。(好きなサッカー選手や食べ物が増えているのも、時代の変化か。)

最後に、「はじめてアート」について少しだけ考えてみたい。「初めて見ること」と「始めてみること」、言葉の綾と言われればそれまでかもしれないが、両者は互いに密接に結びついているように思えてならない。なぜならば、普段信じているものの見え方が崩れ去る時に初めて、人は見ることについて自覚するからだ。美術批評家の東野芳明は「現代観衆論—今日の芸術がめざすもの」(『展望』1967年5月)の中で、観衆の自己保身を指摘し、それが崩れ去る状況を「自己崩壊」と呼んでいる。世界と出会いなおす動機をもたらし、実行に移すこと。それこそが「アート」にまつわる本書の謎かけに思え、いたずらっぽく笑う大岩の姿が重なって見えるのだ。

各位

謹啓 春陽の候 皆様におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。
平素は格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。

さてギャラリーキャプションでは4月29日から6月4日まで、絵本出版記念「大岩オスカル”はじめてアート”」を開催いたします。本展はブラジル出身の美術作家 大岩オスカルによるもので、当廊では2年ぶり9回目の個展となります。

1965年ブラジル・サンパウロに日系ブラジル人2世として生まれた大岩オスカルは、サンパウロ大学建築学部在学中より制作活動を開始し、卒業後の1991年に来日しました。そして10年あまりの日本での作家活動を経て、2002年からは活動の拠点をニューヨークに移し、アメリカ、ブラジルの他、ヨーロッパ各地で国際的に活動を展開しています。日本では、2008年に東京都現代美術館で行われた大規模な個展『夢見る世界』（福島県立美術館、高松市美術館へ巡回）、2019年には金沢21世紀美術館で『光をめざす旅』が開催されるなど、日本を代表する現代美術作家のひとりとして高く評価されています。また今年の「瀬戸内国際芸術祭2022」では、建築家坂茂氏とのコラボレーション「男木島パピリオン」が公開され話題となりました。

大岩オスカルは、主に現代の都市風景を描くことを通じて、そこに生きる私たち人間がかかえるさまざまな社会的問題を、皮肉とユーモアを織りまぜながら、見る者に問いつつけています。デフォルメされたスケール感と、歪んだパースで描かれた不思議な風景に、見る者は視点や立ち位置を定められることなく、画面を漂いながら、いくつかの物語を読み解いていくような感覚を覚えます。また一方では、見慣れた、あるいは既視感のある風景のなかのあるものが、本来とは別のものに見立てられ、そこにかたちを成した光りや影が幻のように重ねられます。それは、ここではない、空想の世界を見るようでありながら、絵空事では済ますことの出来ないリアリティーをもって、現実の世界と重なり合い、私たちの心をとらえます。

本展は、大岩オスカルが1995年に発行した絵本「はじめてアート」が、今年28年ぶりに、アートを取り巻く環境の変化や、多様化したアート作品に考慮しながら、あらたな絵と内容を加えて再版されたことを受け企画されました。「はじめてアート」は、主人公である10才の「ぼく」が愛犬の「パブロ」とともに、身のまわりのものごとをとらえることを起点としながら、アートとは何かを広く考えていくストーリーで、実在のアーティストたちの作品が多く引用されているところも楽しみのひとつです。会期中には、絵本に親しんでいただく機会として、サイン会の他、読書会も予定しています。（読書会の詳細は後日ホームページ、SNSでお知らせします。）展示では、新作のドローイング「The Anatomy Lesson（解剖学講義）」のシリーズ7点と、版画作品をあわせてご紹介いたします。

会期中には是非ご高覧くださいませよう、ご案内申し上げます。

敬具

press release: Oscar Oiwa | Art For The First Time

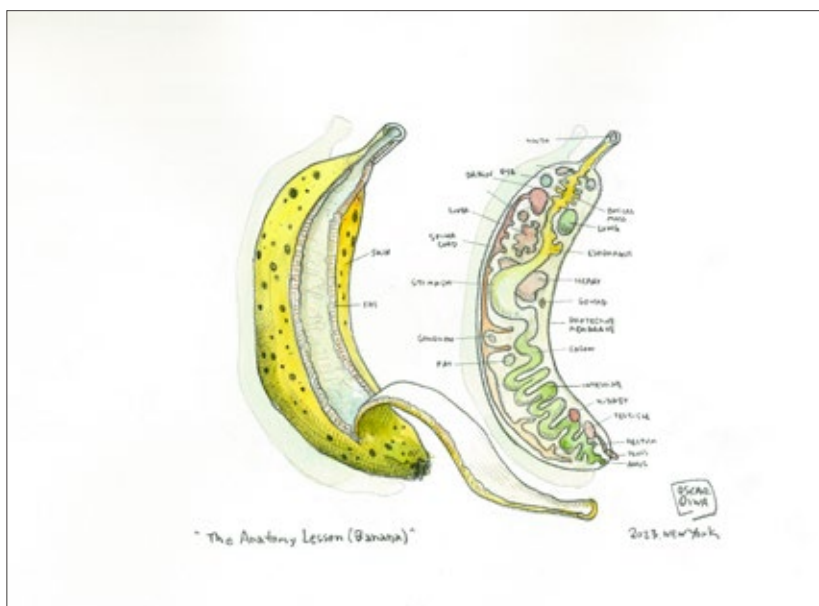


目の前にあるものを書いてみる

鉛筆、水彩絵具、ベニヤ板

45×30cm

大岩オスカル 作「はじめてアート」原画



The Anatomy Lesson (Banana)

解剖学講義 (バナナ)

鉛筆、水彩絵具、紙

30.5×42.1(cm)

2023年



Light Rabbit × Shadow Cat 3

シルクスクリーン

sheet size/ 58 ×58(cm)

ed.100

2023年

大岩オスカル | Oscar Oiwa

1965 サンパウロ生まれ
 1989 サンパウロ大学建築学部卒業
 1991 東京に活動の拠点を移す
 2002 アジアン・カルチュラル・カウンシルならびにジョン・サイモン・グッケンハイム・メモリアル財団の助成により渡米
 現在ニューヨークに滞在し、制作

【主な個展】

1993 「アーバンセル」 (スカイドア・アートプライス青山/ 東京)
 1996 「新作展」 (第一生命南ギャラリー/ 東京)
 1997 「カラスの巣」 (三菱地所アルティウム/ 福岡)
 「Via Crucis - Part I」 (現代美術制作所/ 東京)
 1998 「エデンの園」 (上野の森美術館/ 東京)
 1999 「Sunrise」 (ギャラリーキャプション/ 岐阜)
 2000 「エデンの園」 (現代美術センター/ ライデン、オランダ)
 「マスターピース」 (フジテレビギャラリー/ 東京)
 2001 「Frontier」 (ギャラリーキャプション/ 岐阜)
 2004 「再生フィルム」 (ギャラリーキャプション/ 岐阜)
 2006 「見えない反射」 (池田20世紀美術館/ 静岡)
 「大岩オスカルとガーデニング」 (アリゾナ州立大学美術館/ アメリカ)
 2007 「North Pole」 (ギャラリーキャプション/ 岐阜)
 2008 「夢見る世界」 (東京都現代美術館、福島県立美術館、高松市美術館へ巡回)
 2009 「アジアの台所」 (東京画廊+BTAP/ 北京、中国)
 2010 「抽象的な世界に囲まれている具象的な自分」 (ギャラリーキャプション/ 岐阜)
 2011 「大岩オスカル」 (国立美術館/ リオデジャネイロ、ブラジル)
 2012 「兎と猫、波と巣の出会い」 (ギャラリーキャプション/ 岐阜)
 2018 「Oscar Oiwa in Pradise - Drawing the Ephemeral」 (ジャパン・ハウス/ サンパウロ、ブラジル)
 2019 「光をめざす旅」 (金沢21世紀美術館/ 石川)

【主なグループ展】

1995 「VOCA展 '95」 (上野の森美術館/ 東京)
 1997 「昭和40年会 東京からの声」 (ガレリア・メトロポターナ・デ・バルセロナ/ バルセロナ、ACCギャラリー/ ワイマール、エスパス・フロン/ ローザンヌ)
 1999 「美術館の家出」 (宇都宮美術館/ 栃木)
 「天国で地獄」 (ハラミュージアムアーク/ 群馬)
 2000 「空き地」 (豊田市美術館/ 愛知)
 「ギフトー希望の原理」 (東京都現代美術館)
 「越後妻有アートトリエンナーレ」 (新潟)
 2002 「今、ここにある風景=コレクション+アーティスト+あなた」 (静岡県立美術館)
 2003 「旅-『ここではないどこか』を生きるための10のレッスン」 (東京国立近代美術館)
 2005 「風景遊歩」 (丸亀市猪熊弦一郎現代美術館/ 香川)
 2010 「瀬戸内国際芸術祭」 (男木島/ 香川)
 2022 「感覚の領域 今、「経験する」ということ」 (国立国際美術館/ 大阪)

【主なパブリック・コレクション】

豊田市美術館 東京国立近代美術館 広島市現代美術館 東京都現代美術館 宇都宮美術館 金沢21世紀美術館 群馬県立館林美術館
 森美術館 兵庫県立美術館 高松市美術館 東京ステーションギャラリー フォーエバー美術館 福島県立美術館 新潟市美術館 横浜美術館
 アリゾナ州立大学美術館 フェニックス美術館(アリゾナ) ブラジル大使公邸(東京) デルフィナ・スタジオ・トラスト(ロンドン)
 サンパウロ大学現代美術館 慶南道立美術館(韓国)